

差異の概念化と言語表現

——イギリス英語に different to という言い方があるのはなぜか——

平 塚 徹

要 旨

形容詞 different は from と用いるのが規範的であり、また頻度も高い。しかし、実際には、than と用いられ、またイギリス英語の場合には to と用いられることが知られている。つまり、差異の基準は、起点、比較の基準、着点として標示されうるのである。筆者が調査した範囲では、差異の基準の標示については、起点型（英語の different from）と同伴型（日本語の「…と違う」）の言語が多い。比較型（英語の different than）は通言語的に限定されている。着点型（英語の different to）の言語はまれであり、しかも、形容詞において見られるのであり、動詞の場合には起点型になる傾向にある。

英語：different from/to ... に対して differ from ...

スペイン語：diferente/distinto de/a ... に対して diferir de ...

ウェールズ語：gwahanol i ... に対して gwahaniaethu oddi wrth ...

この偏りを説明するために、以下の仮定をした。差異はメタファーにより距離として理解される。この距離を認識するために二つの操作のいずれかが行われる。(1)基準から遠い対象は、基準から離れていくものとして表示される。(2)対象と基準の間の距離が心的に走査される。走査の方向には、(a)基準から対象へという方向と、(b)その逆がある。(1)は、対象が動くものとして表示されているという意味で、より動的であり、それゆえ動詞として語彙化されやすい。それに対して、(2)は、より静動的であり、形容詞として語彙化されやすい。起点型は、(1)によっても、(2a)によっても動機付けされるが、着点型は、(2b)によってしか動機付けされない。これにより、着点型が特に形容詞において見られ、動詞においては起点型になる傾向があることが説明される。

キーワード：差異、メタファー、虚構移動、心的走査、動詞／形容詞

1. はじめに

何かと違っていること、すなわち、差異を表す英語の形容詞 different は from と用いるのが規範的かつ標準的である。しかし、実際には、to や than も取ることがよく知られている。つまり、「X は Y と違う」という場合、以下の三通りの言い方が並存している。

- (1) a. X is different from Y.
- b. X is different to Y.
- c. X is different than Y.

to はアメリカではほとんど用いられず、イギリス英語である。他方、than はアメリカでもイギリスでも見られる¹⁾。特に後に節が続く場合には、than を取らざるをえない²⁾。

Webster (p.342) によると、different は先ず 1520 年代に to や unto と用いられ、different from の初出は Shakespeare の *Comedy of Errors* (1593) である。different to と different than が規範的でないとされたのは、18 世紀以降のことである。than については、比較級と用いるべきだというのが根拠であろう。to については、同じく差異を表す動詞 differ が to を取らないことが繰り返し根拠とされてきた (Webster, p.342)。

than が用いられる原因については、Poutsma (p.1181), Howard Claudius, *OED* (s.v. *different*, A. 1. b.) が、other than にならったものとしている。また、Evans & Evans (p.136) や Partridge (p.339) は、different の比較級としての意味によるとしている。Radden & Matthis は、than の使用は comparison schema に基づくとしている。その他に、後続の名詞句が複雑なほど than が現れやすいという Rohdenburg (pp.94-96) の研究もある。

different to については、Howard Claudius は opposite to との、*OED* (s.v. *different*, A. 1. b.) は unlike to³⁾、dissimilar to との、『英語語法大事典』(p.980) は dissimilar to, opposed to, contrary to との混同としている。また、Evans & Evans (p.136) は、inferior, anterior, senior などのラテン語の比較級に由来する形容詞が to を取ることと比べることができると述べている。しかし、これらの説明は、different や to の意味自体を問題にしていないという意味で、本質的な説明には至っていないと言える。

このような従来の説明とは異なり、Radden & Matthis は to の使用を「似ているものは引き寄せられる」という attraction schema に基づくものとした。そして、その仮定を検証するために、no different などのように類似性を表している場合には to が続く割合が多いという実験結果を出している。しかし、この考え方は、本来は差異を表す different が to を取る理由については説明を与えてはいないと思われる。また、differ は different と異なり to を取らないが、このことも説明されないまま残る。

他方、Lindstromberg (p.47) は、A is different to B の前置詞 to は、A から B に至るのに移動しなければならない比喩的な距離に焦点が当たっていることを反映しているという見方を出している。本稿は、この見方を発展させて、それにより different to と言うのに対して、differ to とは言わないことも説明されることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。

先ず、第 2 節で、そもそも差異を表す表現にどのような類型があるのか通言語的に見る。次に、第 3 節で、差異を表す形容詞が着点を表す前置詞を取る言語においても、差異を表す動詞は起点を表す前置詞を取る傾向があることを指摘する。そして、第 4 節で、差異の概念化モデルを仮定することにより、差異を表す表現が起点を表す表現を取ったり、着点を表す表現を取ったりすることを説明する。最後に、第 5 節で、差異の概念化モデルから、第 3 節で指摘し

た傾向が説明されることを論ずる。

2. 基準の標示の類型

「XはYと違っている」という場合のYを、以下、「基準」と呼ぶことにする。前節で見た通り、イギリス英語においては差異の基準の標示に *from*, *to*, *than* が用いられる。しかし、そもそも、基準の標示には通言語的にどのような類型が見られるのだろうか。これについては、Radden & Matthis が LINGUIST (<http://linguistlist.org>) に質問を投稿して調査を行い、四つの類型を出しているが、使用される言語形式を網羅的に提示していない。本稿では、これとは独立におもに辞書や文法書によって調査を行い、ほぼ同様の結果を得た。以下では、四つの類型を順番に見ていく。

2.1. 起点型

英語の *different from* と同様に、基準を起点として標示するものを起点型と称することにする⁴⁾。これは、ロマンス諸語、ゲルマン語派、スラブ語派など、ヨーロッパの諸言語で多く見られるものである。なお、再帰代名詞を伴う表現については、再帰代名詞の部分に「(再)」という語釈を付ける。

(2) 英語

a. *different from* ...

違った から

b. *differ from* ...

違う から

(3) フランス語⁵⁾

a. *différent de* ...

違った から

b. *différer de* ...

違う から

(4) イタリア語

a. *differente da* ...

違った から

b. *differire da* ...

違う から

- (5) スペイン語
- a. diferente de ...
違った から
- b. distinto de ...
違った から
- c. diferir de ...
違う から
- (6) ポルトガル語
- a. diferente de ... (『現代ポルトガル語辞典』, s.v. *diferente*)
違った から
- b. diferir de ... (*idem*, s.v. *diferir*)
違う から
- (7) ルーマニア語
- a. diferit de ... (Levițchi, s.v. *diferit*)
違った から
- b. a diferi de ... (*idem*, *diferi*)
不定詞標識 違う から
- (8) ドイツ語
- a. von ... verschieden
から 違った
- b. sich von ... unterscheiden
(再)から 違う
- (9) オランダ語
- a. verschillend van ... (*Cassel*, s.v. *verschillend*)
違った から
- b. verschillen van ... (*idem*, s.v. *verschillen*)
違う から
- (10) デンマーク語
- a. forskellig fra ... (Axelsen, s.v. *forskellig*)
違った から
- b. afvige fra ... (*idem*, s.v. *afvige*)
違う から

- (11) ロシア語
 otličat'sja ot ... (『研究社露和辞典』, s.v. *otličat'sja*)
 違う (再) から
- (12) ポーランド語
 a. różny od ... (Oxford-PWN, s.v. *różny*)
 違った から
 b. różnić się od ... (*idem*, s.v. *różnić*)
 違う (再) から
- (13) チェコ語
 a. odlišný od ... (Hais & Hodek, s.v. *different*)
 違った から
 b. lišit se od ... (*idem*, s.v. *different*)
 違う (再) から
- (14) 現代ギリシア語
 a. diaforetikós apó ... (川原, s.v. *diaforetikós*)
 違った から
 b. diaféro apó ... (*idem*, s.v. *diaféro*)
 違う-直接法.現在.1単 から
- (15) ウェールズ語
 gwahaniaethu oddi wrth ... (Griffiths & Jones, s.v. *differ*)
 違う から

古典語においても、基本的には起点型が用いられた。ラテン語の差異を表す動詞 *differre* は、前置詞 *ab* (～から) を取った。また、奪格を取った例もあるが、これも起点型である (*OLD*, s.v. *differō*)。古典ギリシア語の動詞 *διαφέρειν* や形容詞 *διαφορός* は属格を取ったが (Smyth, § 1401, § 1430)、ギリシア語の属格は起点も表したので、起点型と考えてよい。

起点型はヨーロッパの諸言語以外でも以下のような言語で見られる。

- (16) アラビア語⁶⁾
 a. ikhtalafa ṣan ... (『パスポート』, s.v. 「違う」)
 違う-完了.3単男 から
 b. mukhtalif ṣan ... (*ibid.*)
 違った から

(17) トルコ語

... den başka

(Hony, s.v. *başka*)

から 違った

(18) タイ語

tèεg tàaŋ càag ...

(清水, s.v. 「違う」)

違う から

以上のように、起点型はヨーロッパにおいて優勢だが、それ以外の地域でも見られる。

2.2. 同伴型

日本語では、差異の基準の標示には「と」が用いられる。

(19) X は Y と違う／違っている。

(20) X は Y と異なる／異なっている。

これと同様に、相手を表す語を用いるものを同伴型と称することにする⁷⁾。この型は、例えば、以下のようなアジアの言語で見られる。

(21) 韓国語⁸⁾

... kwa/wa taluta

(['ニューエース日韓辞典], s.v. 「違う」)

と 違う

(22) ベトナム語⁹⁾

khác với ...

(Nguyễn & Phan, s.vv. *differ, different*)

違う と

(23) タイ語

tàaŋ kàb ...

(清水, s.v. 「違う」)

違う と

(24) ペルシア語¹⁰⁾

bā ... tafāvot dāshtan

(黒柳, s.v. *tafāvot*)

と 違い 持つ

bā ... farq dāshtan

(*idem*, s.v. *farq*)

と 違い 持つ

アジア以外では、スワヒリ語に見られる。

(25) スワヒリ語

tofauti na ...

(中島, p.237)

違ったと

ヨーロッパの言語では、英語の *different* が *with* を取った例が *OED* に挙っている¹¹⁾。ラテン語の差異を表す動詞 *differre* は、*cum* (～と) を取った例もある (*OLD*, s.v. *differō*)。これらも同伴型と考えてよい¹²⁾。

同伴型の言語において差異の基準を表すのに用いられる標示は、しばしば、日本語の「と」と同様に、そのままの形で名詞句の等位接続にも使われる語が目につく¹³⁾。

2.3. 着点型

イギリス英語の *different to* のように、基準が着点として標示される場合を着点型と称する¹⁴⁾。この型は、スペイン語においても見られる。2.1 で見た通りスペイン語の差異を表す形容詞 *diferente* と *distinto* は起点を表す前置詞 *de* を取るが、それ以外に着点を表す前置詞 *a* も取る。

(26) *diferente de/a los demás*(Seco, s.v. *distinto*)

定冠詞 他の人たち

(27) *distinto de/a otro*(Seco, s.v. *diferente*)

他のもの

これは、イギリス英語の *different* が *from* と *to* の両方を取ることができるのと類似した状況である。

大まかには、*de* の方が *a* よりも規範的である (Seco, s.vv. *diferente*, *distinto*; Batchelor & San José, pp.4-5; Corominas, p.634; Radden & Matthis, p.244, n.26)。また、Corominas は、*diferente a* はアルゼンチンで好まれ (p.633), *distinto a* はアルゼンチンなどの南米の様々な場所やスペインで好まれるとしている (p.506)。Radden & Matthis は、*diferente a* は特にメキシコの会話スペイン語で用いられるとしている (p.240, n.16)。

フランス語においても、かつて、類似した状況だった。現代のフランス語においては、差異を表す形容詞 *différent* や動詞 *différer* は 2.1 で見た通り起点を表す前置詞 *de* を取るが、16世紀には前置詞 *à* も取った (Huguet, s.vv. *different*, *differer*; Godefroy, s.vv. *different*, *differer*)。

さらに、ケルト語派のウェールズ語においても、差異を表す形容詞が着点を表す前置詞を取る。

(28) ウェールズ語

gwahanol i ...

(Griffiths & Jones, s.v. *different*)

違った

明確に着点型だと言えるのは以上であった。つまり、調査できた範囲内では、着点型はかなりまれな類型であると言える。

一見着点型のように見えるが、実は起点型ではないかと考えられる場合もある。タガログ語の差異を表す形容詞 *iba* は基準を *sa* で標示する (*Diksyunaryong Filipino-English*, s.v. *iba*)。 *sa* は非常に多義的であるが、重要な用法として着点の標示がある。

(29) a. *pumunta sa* ... (和泉, p.69)

行く に

b. *magpunta sa* ... (*ibid.*)

行く に

これを見ると、タガログ語の *iba* は着点型だと思われるかもしれない。しかし、*sa* は起点を表すこともある。

(30) *manggaling sa* ... (*ibid.*)

来る から

sa が着点を表すか、起点を表すかは、動詞に依存していると考えられる。よって、*iba* と用いられる *sa* が着点か起点かは判断できない。しかし、差異の基準の標示は通言語的に起点型が多く見られるのに対して、着点型がまれであることを考えると、*iba sa* ... は起点型である可能性が高いと思われる¹⁵⁾。

いずれにしても、着点型はまれであると考えられる¹⁶⁾。

2.4. 比較型

英語の *different than* のように、比較級の基準を表す標示が用いられる場合を比較型と称する¹⁷⁾。比較級の基準自体が起点などの標示をされる言語もあるが、英語の *than* と同様に主に比較級で用いられる標示に限定する。よって、基本的に比較級で用いられる基準の標示を有する言語でなければ、この型にはなり得ない。

英語の *different* は、差異の基準が名詞句でなく節や前置詞句の場合には、*than* を取らざるをえない (Evans & Evans, p.136; *Webster*, p.341; 『旺文社レクシス英和辞典』, p.481)。

スペイン語の *diferente* と *distinto* は、2.1 で見た通り起点を表す前置詞 *de* を取り、2.3 で見た通り着点を表す前置詞 *a* を取るが、実は、基準が名詞句でない場合には比較の基準を表す *que* を取りうる。特に、前置詞句や副詞的な表現が続く場合には、*que* のみが可能である (*Diccionario panhispánico de dudas*, s.vv. *diferente*, *distinto*)。

フランス語では、2.1 で見た通り *différent* は通常は起点を表す前置詞 *de* を取り、比較の基準を表す *que* を取ることは規範的には認められていない。しかし、現実には、基準が前置詞句である場合には実例が確認される。

(31) Le paysage était totalement différent qu'à ce temps de février

風景はこの二月の時期とはまったく違っていた

(Michel Davet, *Ma belle-mère l'ogresse*, in Georquin, p.136)

(32) Belfort est en bas et on le voit d'une façon différente que depuis le pré sous la Miette

ベルフォールは下にあり、ラ・ミオットの下の牧場からとは違った風に見える。

(Alain Gerber, *Le faubourg des coups-de-trique*, in Colin, s.v. *différent*)

それぞれ、基準が前置詞 *à* と *depuis* で始まるために、*que* を用いたと考えられる。

いずれの言語においても、一般的に比較型は基準が名詞句以外のものである時に現れやすいと言える。これは、前置詞が名詞句を要求するのに対して、比較の基準を表す接続詞にはそのような制約がないからである。

比較型には、ゲルマン語において、以下のような例もある。

(33) ドイツ語

anders als ...

違ったより

(34) オランダ語

anders dan ...

(Radden & Matthis, p.240)

違ったより

(35) デンマーク語

anderledes end ...

(*ibid.*)

違った より

いずれも、差異を表す語は英語の *other* に対応する語から派生した副詞である¹⁸⁾。そのため、派生の元になっている語と同様に比較級の基準を表す標示を取ったものと考えられる¹⁹⁾。

比較型は、インド・ヨーロッパ語族以外でも、フィンランド語で見られる。

(36) フィンランド語

erilainen kuin ...

(吉田, p.211)

違った より

全体的に見て、比較型はまれであり、かなり偏った状況で見られるものと言える。

2.5. まとめ

以上、様々な言語における差異の基準の標示を見てきた。大まかに言って、ヨーロッパにおいては起点型が優勢で、アジアでは同伴型が優勢である。それに対して、比較型や着点型は、調査できた範囲では、ヨーロッパで周辺的に見られるものであると言える。

3. 基準標示の類型と品詞

第2節では基準標示の類型を見たが、類型の現れ方に品詞によって偏りのあるものがある。

まず、英語の差異を表す形容詞 different は than を取るが、動詞の differ は than を取らない。つまり、比較型の標示は形容詞の場合に現れ、動詞の場合には現れないのである。これはスペイン語の場合も同様である。2.4 で見た通り差異を表す形容詞 diferente と distinto は基準が名詞句でない場合には比較型の que を取る 경우가、特に前置詞句や副詞的な表現が続く場合には比較型の que のみが可能である。しかし、差異を表す動詞 diferir が比較型の標示を取ることはない。また、これも 2.4 で見た通り、フランス語の差異を表す形容詞は、規範的には認められないものの、現実には比較型の que を取る実例が確認される。しかし、動詞の différer では比較型の標示は見られない。これは、そもそも比較級が形容詞の範疇であることから、動詞にはそぐわないためと考えられる。なお、differently than は誤用とされつつも実例が存在する。

(37) I felt about it differently than I had ever felt about it before.

(Frank Tilsley, *I'd hate to be dead*, in Partridge, p.96)

これは、副詞にも比較級があるからと言える。

次に、着点型の標示について見る。英語の形容詞の different は、from だけでなく、to も取る。しかし、different と同じく差異を表す動詞 differ は、from だけを取り、to は取らない。

(38) a. different from/to ...

b. differ from ...

実際、動詞 *differ* が *to* を取らないことは、繰り返し、*different to* と言うべきないとする根拠とされてきた (*Webster*, p.342)。

スペイン語でも類似した状況である。前節で見たとおり、差異を表す形容詞の *diferente* や *distinto* は、起点型の *de* も、着点型の *a* も取る。しかし、やはり差異を表す動詞 *diferir* は、起点型の *de* だけを取り、着点型の *a* は取らないのである。

- (39) a. *diferente de/a* ...
 b. *distinto de/a* ...
 c. *diferir de* ...

ウェールズ語では、差異を表す形容詞 *gwahanol* は、(28) (= (40a)) で見た通り着点を表す前置詞 *i* を取るが、動詞 *gwahaniaethu* は、(15) (= (40b)) で見た通り起点を表す前置詞 *oddi wrth* を取る。

- (40) a. *gwahanol i* ... (Griffiths & Jones, s.v. *different*)
 違った
 b. *gwahaniaethu oddi wrth* ... (*idem*, s.v. *differ*)
 違う から

しかし、フランス語においては、かつて、差異を表す形容詞 *différent* だけでなく、差異を表す動詞 *différer* も、着点を表す前置詞を取っていた。いずれの語も、現代語では起点を表す前置詞 *de* しか取らないが、16世紀には着点を表す前置詞 *à* を取ることもできたのである (*Huguet*, s.v. *différer*; *Godefroy*, s.v. *différer*)。しかし、*Littre* (s.v. *différent*) を見ると、形容詞 *différent* が *à* を取ったことが述べられて、1860年の用例も挙っているのに対して、動詞 *différer* については *à* を取る構文への言及がない。つまり、形容詞の方が、動詞よりも、後の時代まで着点型の標示を取り続けたのである。

まとめると、差異を表す動詞が着点型の標示を排除するわけではないが、総体的に見て、同じ差異を表す語であっても、動詞より形容詞の方が着点型の標示を取る傾向が強いと言える。品詞の違いが基準表示の選択の違いを生み出すのはなぜか、これは考察に値する問題であると思われる。

4. 差異の概念化モデル

本節では、人間が差異というものをどのように捉えるかについて仮説を提示し、それに基づ

いて起点型や着点型の標示がどのように生ずるかを説明する。

4.1. 差異距離メタファー

人間は差異というものをしばしば空間的な距離に喩えるメタファーによって理解していると考えられる。このメタファーにおいては、同じであることは同じ場所にあることに、違っていることは違った場所にあることに喩えられる。同じか違っているかだけでなく、類似性あるいは差異性の程度も、空間的な距離に喩えられる。例えば、似ていることを「近い」ということがある。

(41) a. 味は鶏肉に似ている。

b. 味は鶏肉に近い。

また、全く異なることを「大きな隔たりがある」と言うのも、差異の程度を距離の大きさに喩えた表現である。このメタファーを差異距離メタファーと称することにする。このメタファーは、Lakoff & Johnson (p.59) の SIMILARITY IS PROXIMITY (SIMILARITY IS CLOSENESS と DIFFERENCE IS SPATIAL DISTANCE を含む) や Radden & Matthis (pp.231-232) の SIMILARITY IS CLOSENESS および DIFFERENCE IS DISTANCE に相当する。そして、差異を捉えるためにこのメタファーによって構築される空間を差異距離空間と称することにする。

しかし、実は、差異を距離に喩えて理解するというだけでは必ずしも十分ではないのである。なぜなら、距離があることを概念化するための操作があるからである。その操作の方法により、差異の概念化モデルとして、「移動モデル」と「走査モデル」の二つが生じることになる。

4.2. 移動モデル

「移動モデル」においては、差異距離空間において対象 O と基準 S が離れていることを、対象 O が基準 S から離れていく移動として捉える。これを図示すると、図 1 のようになる。

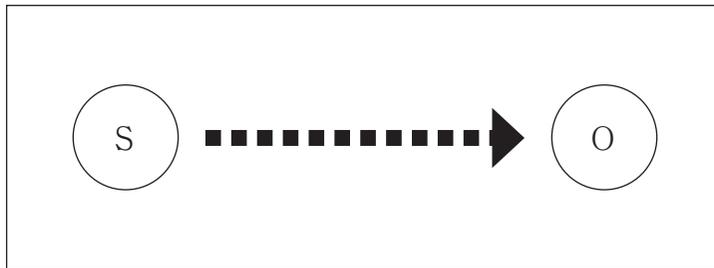


図1 移動モデル

ただし、この移動は、対象 O と基準 S が離れていることを捉えるための仮想的なものである。そのことを、図では移動の矢印を破線にすることによって表している。この移動は、Talmy (2000, pp.99-172) のいう「虚構移動」(fictive motion) の一種と考えられる。この移動モデルの説明は、Lindstromberg の DIFFERENCE IS PHYSICAL SEPARATION や Nikiforidou の DIFFERENCE IS SEPARATION FROM AN ORIGIN を、差異距離メタファーと仮想移動に分析したものと言える。

差異の移動モデルによる概念化は、違っていることを表す語の語源や語形成にも現れている。ラテン語の差異を表す動詞 *differre* は、運ぶことを表す動詞 *ferre* に分離を表す接頭辞 *dis-* をつけたものである。英語の *differ* および *different* やロマンス諸語の差異を表す動詞および形容詞はこれに由来している²⁰⁾。ドイツ語の差異を表す形容詞 *verschieden* は、もともと「去る」ことを意味する動詞 *verscheiden* の過去分詞であった (Kluge, s.v. *verschieden*)²¹⁾。日本語で、大きく異なることを「かけ離れている」というのも、差異の移動モデルにもとづいた表現であると考えられる。

このような移動モデルにおいては、基準 S は、対象 O の移動の起点である。そのため、差異を「移動モデル」でもって概念化すると、基準 S を起点として標示することが動機付けられる。

タイ語の差異を表す表現には、(18) (= (42a)) で見た起点型のものと、(23) (= (42b)) で見た同伴型のものがある。

- (42) a. tɛ̀ɛg tàaŋ càag ... (清水, s.v.「違う」)
 違う から
 b. tàaŋ kàb ... (ibid.)
 違う と

差異を表す語 *tàaŋ* は単独で用いられると同伴型になる。それに対して、「分離する」という意味の *tɛ̀ɛk* を伴うと起点型となるのである。ここでは、差異の概念化に移動モデルが用いられ

ると基準の標示が起点型になるということが明示的に現れている。

4.3. 走査モデル

走査モデルは、差異距離空間において対象 O と基準 S が離れていることを、対象 O と基準 S の間を走査することにより捉えるものである。対象 O と基準 S の間を走査するということは、対象 O と基準 S が異なる場所にあるということであり、それゆえ、両者が異なっているということになる。

ここで、対象 O と基準 S の間の走査を、どの方向で行うかによって、走査モデルは二つのサブモデルに分けられる。

4.3.1. 基準起点走査モデル

一つ目は、走査が基準 S から対象 O へと行われる「基準起点走査モデル」である。このモデルでは、基準 S は走査の起点となるので、基準を起点として標示することが動機付けられる。これを図示すると、図 2 のようになる。

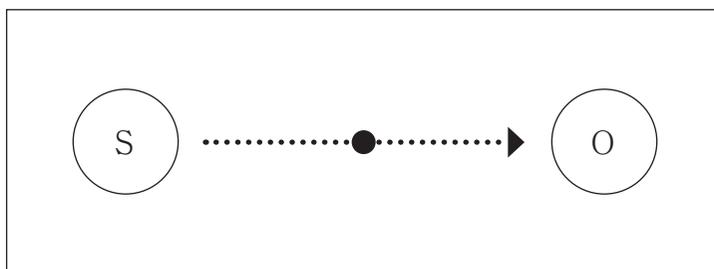


図 2 基準起点走査モデル

この走査は、Langacker のいう「心的走査」(mental scanning) だと考えられる。

これは、移動モデルの場合と結果的に同じ標示となる。逆に言うと、起点型は移動モデルと基準起点走査モデルのいずれからも動機付けられることになる²²⁾。

4.3.2. 基準着点走査モデル

もう一つの走査モデルは、対象 O から基準 S まで走査する「基準着点走査モデル」である。このモデルでは、基準 S は走査の着点となるので、基準を着点として標示することが動機付けられる。これを図示すると、図 3 のようになる。

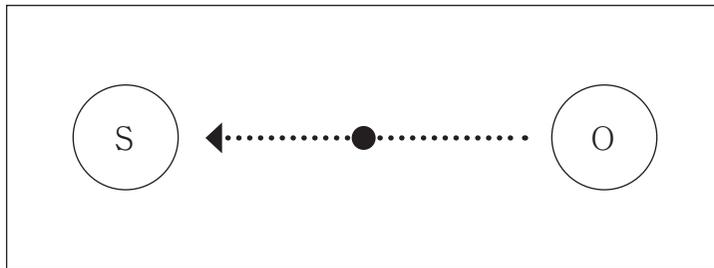


図3 基準着点走査モデル

つまり、基準着点走査モデルは、着点型の標示を動機付けるのである。

よって、イギリス英語の *different to* やスペイン語の *diferente/distinto a* などは、基準着点走査モデルに動機付けられて成立したと考えられる²³⁾。

5. 差異の概念化モデルと品詞

第3節で、着点型の標示は差異を表す語が形容詞である場合に優先的に表れ、動詞である場合にはほとんど起点型であることを見た。このことを、第4節で提示した差異の概念化モデルから説明する。

XがYと違っていることを移動モデルで概念化する場合には、Xが現実には移動しないとしても、移動するものとして捉えられている。Xが移動することを表すには、Xを主語とする動詞を用いるのが最も自然な言語化のパターンである。このXの移動はYから離れていくものなので、Yは起点として標示される。こうして、X differs from Yなどの動詞を用いた起点型の表現になる。

しかし、XがYと違っているという事態そのものは動きのない静態的なものである。このような事態は、形容詞を有する言語においては、形容詞として表現されうる²⁴⁾。特に分詞を有する言語の場合、しばしば、差異を表す動詞の分詞が形容詞化して、差異を表す形容詞になる。例えば、英語の *different* やロマンス語のこれに対応する形容詞は、ラテン語の差異を表す動詞 *differre* の現在能動分詞 *differens* が形容詞化したものである。しかし、静態的な事態と言っても、それを捉えるために虚構移動を含む動的な概念化モデルを用いることができる。よって、Yはやはり移動の起点なので、X is different from Yなどの形容詞を用いた起点型の表現になる。

以上の通り、差異を移動モデルにより概念化する場合には、動詞あるいは形容詞を用いた起点型の基準標示が生ずると考えられる。

次に、XがYと違っていることを走査モデルにより概念化する場合を考える。このモデルでは、XもYも移動しない。移動モデルではXが移動するものとして捉えられるので、Xを

主語とする動詞を用いるのが最も自然な言語化のパターンであった。しかし、走査モデルでは、Xが移動しないので、動詞を用いるより、形容詞を用いる方がより自然な言語化のパターンとなる。ここで、差異の概念化モデルが基準起点走査モデルである場合、つまり、走査がYからXに向って行われる場合、Yは起点なので、X is different from Yなどの形容詞を用いた起点型の表現になる。しかし、もし差異が基準着点走査モデルで概念化される場合、つまり走査がXからYに向って行われる場合、Yは着点なので、X is different to Yという形容詞を用いた着点型の表現になる。

以上より、以下の結論を得る。まず、着点型の標示は基準着点走査モデルという静態的な概念化モデルからしか生じないため、差異が形容詞で表される場合に優先的に現れる。それに対して、起点型は、基準起点走査モデルからも、移動モデルからも生ずる。特に差異が動詞で表される場合は、差異の概念化モデルとしては動態的な移動モデルが相応しいので、圧倒的に起点型になりやすいのである。

6. まとめ

差異の基準の表示には、起点型、同伴型、着点型、比較型といった類型が見られる。この中で、起点型と同伴型は多く見られるが、着点型と比較型はまれである。

比較型については、基本的に比較級の基準を表す標示が存在していることや、差異が形容詞や副詞で表されていることが前提になっていることから、まれであることが説明される。

着点型については、差異が形容詞で表される場合に優先的に表れ、動詞で表される場合にはほとんど起点型である。このことは、移動モデルという動態的な概念化モデルからは起点型の標示が生ずるのに対して、着点型の標示は基準着点走査モデルという静態的なモデルからしか生じないことから説明される。

注

- 1) Evans & Evans, p.136; *Webster*, p.341; Radden & Matthis, pp.245-246; 『旺文社レクシス英和辞典』, p.481; Mair, pp.25-28.
- 2) Evans & Evans, p.136; *Webster*, p.341; 『旺文社レクシス英和辞典』, p.481.
- 3) 古語においては unlike to という語法があった (*OED*, s.v. *unlike*, 1. b.)。
- 4) Radden & Matthis (p.240) は、これに該当する言語として、英語、デンマーク語、オランダ語、アフリカーンス語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポーランド語、ロシア語、セルボ・クロアチア語、ギリシア語、ヘブライ語、ハンガリー語を挙げている。
- 5) カルヴァン『キリスト教綱要』(16世紀)には、動詞 *différer* が何かと離れることを表す *d'avec* を取っている例がある (*Godefroy*, s.v. *différer*)。これも、起点型に類する例と考えてよいだろう。現代の規範的な文法書である *Girodet* (s.v. *différer*) は、*différer* は *d'avec* とは決して用いないとしているが、このような記述があること自体が現実には用いられることがあるのではないかと推測させるものである。

- 6) Wehr は, ikhtalafa は ʕan を, mukhtalif は min を取るとしている。いずれの前置詞も起点を表すが, min が単に起点を表すのに対して, ʕan の方は「～から離れて」という意味がある。
- 7) Radden & Matthis (p.240) は, これに該当する言語として, ペルシア語, 中国語, 日本語, 韓国語を挙げている。
- 8) kwa は子音の後での, wa は母音の後での異形態である。
- 9) ベトナム語の khác は, 基準がそのまま続く場合もある。
 (i) Người khác vượn. (Bystrov & Stankevich, p.1956)
 人 違う 類人猿
- 10) tafāvot dāshṭan および farq dāshṭan は「違う」ことを表す複合動詞である。
- 11) 英語の differ は, 普通, from を取るが, 「意見を異にする」の意味の時は, with を取る (cf. Webster, s.v. differ)。
- 12) アイルランド語の差異を表す形容詞 difriúil および動詞 difrigh は前置詞 le を取る (Ó Dónaill, s.vv. difriúil, difrigh)。le には基本的な意味として「～といっしょに」があるので (オシール, p.146), 同伴型かもしれない。しかし, そのほかにも様々な用法があり (Ó Dónaill, s.v. le), 同伴型と断言できない。
- 13) ペルシア語の bā, 英語の with, ラテン語の cum は例外である。他方, ベトナム語で日本語の「と」に相当するのは và であるが, (22) で差異の基準を標示している vói も名詞の等位接続に使える。
- 14) Radden & Matthis は, これに該当する言語として, 英語とクルド語を挙げている (240 ページの表 4 では「トルコ語」となっているが, クルド語の誤りと思われる)。ただし, クルド語については, 注 15 で述べる通り, 着点型とすることには疑問がある。また, 後述のスペイン語の diferente a については, Radden & Matthis は注 16 で言及することとどめている。
- 15) 注 14 で述べた通り, Radden & Matthis (p.240) はクルド語は着点型だとしている。ここで着点の標示とされているのは前置詞 la のようである (p.236, n.9)。しかし, la は起点を表す場合もある (Thackston, p.21)。よって, クルド語は着点型ではなく, 起点型である可能性がある。
- 16) ラテン語の差異を表す動詞 differre には, 与格と用いられた例もある (OLD, s.v. differō)。これは, 古典期には韻文において, それより後は散文において見られたものである (Kühner & Stegmann, p.317, p.319; Brenous, p.150; Gaffiot, s.v. differō)。Kühner & Stegmann (p.317, p.319) は, この与格の使用をギリシア語の模倣だとした。これに対して, Schäfler (pp.46-47) はギリシア語では属格を取るのが本来であることを指摘し, むしろ同一性や類似性の概念との類推によるものと説明した。Brenous (p.150) も基本的にこの可能性を認めている。この標示については, 着点型に類似していると考えられるが, 与格は端的に移動の着点を表しているわけではない。与格自体の意味が多岐にわたり考察が難しいため, 本稿では扱わないことにする。
- 17) Radden & Matthis は, これに該当する言語として, 英語, ドイツ語, デンマーク語, オランダ語, アフリカーンス語, フィンランド語を挙げている。
- 18) ドイツ語の anders については Hammer (7.4.3) を, デンマーク語の anderledes については Allan et al. (603 (b)) を見られたい。オランダ語やデンマーク語では, ここで問題にしている用法についてはしばしば形容詞として扱われるが, 語源および語構成から見て本来は副詞である。
- 19) other (他の, 別の) と different (違った) は意味が異なる。この点については, Howard Claudius が, 次のように述べている。
 (i) A different thing is undeniably an other thing but, on the contrary, an other thing is not, necessarily, in English, a different thing.
 二つの物を比べて, 相違点があれば違っていることになるが, 相違点がなければ違っていないことになる。しかし, 二つである以上, 別の物であることに変わりはない。哲学における同一性についての用語を用いれば, different は質的同一性 (qualitative identity) の否定に, other は数的同一性 (numeric identity) の否定に対応すると言える (『岩波哲学・思想事典』, p.1151)。また, タイプとトークンという用語を用いれば, different はタイプが同じでないこと, other はトークンが同じでないこととも言える。(33) から (35) では, 問題の語が副詞であることから, 「他の」あるいは「別の」様

態にあることを表すので、「違った」という意味になると考えられる。もっとも、Howard Claudius は(i)の引用に続けて次のように述べている。

(ii) Most of the European languages do not agree with English in this.

つまり、ヨーロッパの多くの言語において other 自体も different の意味で用いられることがあり、実際には両者の区別は難しい。

- 20) different が分離を表す接頭辞 dis- を有することは、この形容詞が from を取るべきだとする根拠にもされてきた (Radden & Matthis, p.244)。
- 21) verscheiden は現代ドイツ語においては、「死去する」という意味になっている。
- 22) Lindstromberg (p.47) も、この点に気がついており、A is different from B を DIFFERENCE IS PHYSICAL SEPARATION というメタファーで説明しつつも、B から A に至るのに移動しなければならない比喩的な距離に焦点が当たっていることを反映しているのかもしれないとしている。
- 23) Radden & Matthis は different to は「似ているものは引き寄せられる」という attraction schema に基づくものとした。そして、その仮定を検証するために、no different などのように類似性を表している場合には to が続く割合が多いという実験結果を出している。しかし、この結果は、空所に当てはまる前置詞を答えさせると言う実験状況において、no different を類似性を表している語句として再解釈することが促されただけではないかと考えられる。
- 24) 差異という事態の言語化が、動詞でも形容詞でもなされるということは、日本語の「違う」が、「違かった」「違くない」「違くて」などの形容詞の活用をされることにも現れている (井上, pp.66-72; 『辞典〈新しい日本語〉』, pp.128-132; 川口・角田, pp.34-36; 『みんなの日本語事典』, pp.54-55)。

参考文献

- Allan, R. et al. (1995) *Danish: a comprehensive grammar*, London and New York : Routledge.
- Axelsen, J. (1995) *Dansk-Engelsk Ordbog*, 10. udgave, Copenhagen : Gyldendal.
- Batchelor, R. E. & M. Á. San José (2010) *A reference grammar of Spanish*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Brenous, J. (1895) *Étude sur les hellénismes dans la syntaxe latine*, Paris : Klincksieck.
- Bystrov, I. S. & N. V. Stankevich (2007) "Reciprocal constructions in Vietnamese", in V. P. Nedjalkov (ed.) *Reciprocal Constructions*, Amsterdam : John Benjamins.
- Cassel = *Cassel's English-Dutch, Dutch-English dictionary* (1967) London : Cassel.
- Colin, J.-P. (2006) *Dictionnaire des difficultés du français*, Paris : Le Robert.
- Corominas, J. (1980-1991) *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*, Madrid : Gredos.
- Cownie, A. R. (2001) *A dictionary of Welsh and English idiomatic phrases*, Cardiff : University of Wales Press.
- Diccionario panhispánico de dudas* (2005) Madrid : Santillana.
- Diksyunaryong Filipino-English* (1993) Pasig, Metro Manila : Komisyon sa Wikang Filipino.
- Evans, B. & C. Evans (1957) *A dictionary of contemporary American usage*, New York : Random House.
- Gaffiot, F. (2001) *Le Gaffiot de poche : dictionnaire Latin-Français*, Paris : Hachette.
- Georgin, R. (1951) *Pour un meilleur français*, Paris : Editions André Bonne.
- Godefroy, F. (1965) *Dictionnaire de l'ancienne langue française et de tous ses dialectes du IX^e au XV^e siècle*, Vaduz : Kraus Reprint Ltd.
- Griffiths, B. & D. G. Jones (1995) *The Welsh Academy English-Welsh dictionary*, Caerdydd : Gwasg Prifysgol Cymru.
- Hais, K. & B. Hodek (1991-1993) *Velký anglicko-český slovník = English-Czech dictionary*, Praha : Academia.
- Hammer, A. E. (1971) *Hammer's German Grammar and Usage*, 2nd ed., Revised by M. Durrell, Lincolnwood : NTC Publishing Group.

- Hony, H. C. (1958) *A Turkish-English dictionary*, Oxford : Clarendon Press.
- Howard Claudius, R. (1926) "Different: to, from, or than?", *American speech*, 1(8), p.446.
- Huguet, E. (1946) *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle*, Paris : Didier.
- Kluge, F. (1989) *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, 22. Auflage, Berlin : Walter de Gruyter.
- Kühner, R. & C. Stegmann (1966) *Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache*, Zweiter Teil : Satzlehre, Erster Band, Hannover : Hahnsche Buchhandlung.
- Langacker, R. W. (2000) *Grammar and conceptualization*, Berlin, New York : Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G & M. Johnson (1999) *Philosophy in the flesh: the embodied mind and its challenge to Western thought*, New York : Basic Books.
- Levițchi, L. (1965) *Dicționar român-englez*, București : Editura Științifică.
- Lindstromberg, S. (2010) *English prepositions explained*, revised edition, Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.
- Littré, E. (1966) *Dictionnaire de la langue française*, tome 3, Paris : Gallimard/Hachette.
- Mair, C (2006) *Twentieth-century English: history, variation, and standardization*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Nguyễn, Đ. H. & V. G. Phan (2006) *Tuttle English-Vietnamese dictionary*, North Clarendon : Tuttle.
- Nikiforidou, K. (1991) "The meaning of the genitive: A case study in semantic structure and semantic change", *Cognitive Linguistics*, 2(2), pp.149-205.
- Ó Dónaill, N. (1977) *Foclóir Gaeilge-Béarla*, Baile Átha Cliath : Oifig an tSoláthair.
- OED = Oxford English dictionary*, second edition (1989) Oxford : Clarendon Press.
- OLD = Oxford Latin dictionary* (1982) Oxford : Clarendon Press.
- Oxford-PWN = Oxford-PWN Polish-English dictionary* (2002) Oxford : Oxford University Press.
- Partridge, E. (1965) *Usage and abuse: a guide to good English*, London : Hamish Hamilton.
- Poutsma, H. (1916) *Grammar of late modern English, Part II, Section I, B, Pronouns and numerals*, Groningen : P. Noordhoff.
- Radden, G. & E. Matthis (2002) "Why similar to, but different from?", in H. Cuyckens & G. Radden (eds.) *Perspectives on Prepositions*, Tübingen : Niemeyer.
- Rohdenburg, G. (2002) "Processing complexity and the variable use of preposition in English", in H. Cuyckens & G. Radden (eds.) *Perspectives on Prepositions*, Tübingen : Niemeyer.
- Seco, M. (1998) *Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española*, Madrid : Espasa Calpe.
- Schäfler, J. (1884) *Die sogenannten syntaktischen Gracismen bei den augusteischen Dichtern*, Amberg : Eduard Pohl.
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume 1, Concept Structuring Systems*, Cambridge : The MIT Press.
- Thackston, W. M. (2006) *Sorani Kurdish: A reference grammar with selected readings*, Unpublished manuscript, Harvard University, Available at http://www.fas.harvard.edu/~iranian/Sorani/sorani_complete.pdf, Last accessed September 4, 2014.
- Webster = Webster's dictionary of English usage* (1989) Springfield, Massachusetts : Merriam-Webster.
- Wehr, H. (1976) *A dictionary of modern written Arabic*, edited by J. Milton Cowan, third edition, Urbana : Spoken Language Services.
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』, 東京 : 岩波書店.
- 岩波哲学・思想事典 (1998) 東京 : 岩波書店.
- 英語語法大事典 (1996) 東京 : 大修館書店.
- 旺文社レクシス英和辞典 (2003) 東京 : 旺文社.
- 川口良・角田史幸 (2005) 『日本語はだれのものか』, 東京 : 吉川弘文館.
- 川原拓雄 (2004) 『現代ギリシア語辞典』, 東京 : リーベル出版.

- 黒柳恒男（2002）『新ペルシア語大辞典』，東京：大学書林。
研究社露和辞典（1988）東京：研究社。
現代ポルトガル語辞典，改訂版（2005）東京：白水社。
辞典〈新しい日本語〉（2002）東京：東洋書林。
清水道之助（1996）『日泰小辞典』，豊中：清水道之助。
中島久（1986）『スワヒリ語テキスト』，箕面：大阪外国語大学 LL。
ニューエース日韓辞典（뉴에이스 일한사전）（1993）ソウル（서울）：金星出版社（금성출판사）
パスポート＝パスポート日本語アラビア語辞典（2004）東京：白水社。
みんなの日本語事典（2009）東京：明治書院。

Conceptualization and linguistic expressions of difference

—Why one can say *different to* in British English—

Tohru HIRATSUKA

Abstract

The adjective *different* is used with *from* normatively and frequently. But, it is well known that it can be used with *than*, and, in British English, *to*. In other words, the standard of difference can be marked as source, standard of comparison, or goal. As far as I have examined, many languages mark the standard of difference as source (ex. English: *different from ...*) or as accompaniment (ex. Japanese: ... *to chigau*, lit. “differ with ...”). The expressions like *different than ...* are limited cross-linguistically. Few languages mark the standard of difference as goal, and this happens more often with adjectives than with verbs, which prefer marking as source:

English: *different from/to ...*, but *differ from ...*

Spanish: *diferente/distinto de/a ...*, but *diferir de ...*

Welsh: *gwahanol i ...*, but *gwahaniaethu oddi wrth ...*

To explain this bias, I hypothesize that difference is understood metaphorically as distance and the distance is assessed by either of the following two operations: (1) the object which is distant from the standard is represented as moving away from it; (2) the distance between the object and the standard is scanned mentally either (a) in the direction from the standard to the object or (b) in the opposite direction. (1) is relatively dynamic in the sense that the object is represented as moving, therefore prefers lexicalization as a verb, while (2) is relatively static, therefore prefers lexicalization as an adjective. The marking of the standard as source can be motivated by either (1) or (2a) but the marking as goal can be motivated only by (2b). This explains why the marking as goal is observed especially with adjectives and the marking as source is preferred with verbs.

Keywords: difference, metaphor, fictive motion, mental scanning, verb/adjective

